

筑紫（九州）の万葉集と風景画シリーズ（第七十一回）

つくしのみちのくち

しかあま

## 「筑前の国の志賀の白水郎の歌」

筑前の国の「志賀」は今の福岡県福岡市東区にある島で九州本土から約8キロ延びた砂州「海の中道」で繋がれ陸続きとなっており九州北西部の海域「玄界灘」に面する博多湾口の東側突端部に握りこぶし状に突出した周囲12キロ余りの小島で古昔より、海人の島として名高い。

○万葉集に奈良時代の初め、この志賀に住む白水郎（＝漁夫・海人）『荒尾』に関する歌が十首詠われている。

おほきみ

つか

1) 大君の 遣はさなくに さかしらに 行き

あらま

し荒尾ら 沖に袖振る

卷十六—3860

（解説） 天皇の命をうけて派遣されたのでもないのに、みずから進んで出かけて行った『荒尾』、その荒尾が、沖で別れを惜しんでしきりに袖を振っている。（十首のうちの一首目の歌）

2) 志賀の山 いたくな伐りそ 荒尾らが よ

しの

すかの山と 見つつ徳はむ

卷十六—3862

（解説） 志賀の山、この山の木は余りひどく伐採して下さるな。あの荒尾

のゆかりの山と見ながら、ずっと偲んで行きたい。志賀の山（志賀島全体にわたる山・最高一六六メートル）（十首のうちの三首目の歌）

めこなり

3) 荒尾らは 妻子が業をば 思はずろ 年の

やとせ

八年を 待てど来まよはず

卷十六—3865

（解説）あの荒尾は、私たち妻子の暮らしむきなど思ってもくれないらしいわ。だって長の年月待っていても、帰って来ては下さらぬ。

（註）「八年」は長の年月をいう。（十首のうちの六首目の歌）

おき とり かも

ふね

かへ

こ

やら

さき

4) 沖つ鳥 鴨といふ船の 帰り来ば 也良の崎

もり はや っ

守 早く告げこそ

卷十六—3866

（解説）「鴨」という名の船が帰って来たならば、也良の崎守よ、早く告げておくれよ。と妻たちは悲痛な思いで呼びかけている。

（註）①也良の崎は博多湾中心に浮かぶ能古島北端の岬角をいう。今も也良岬という。真北に志賀島を見る②「埼守」とは埼の番人、即ち大陸勢力進攻の守備にあたった防人（さきもり）のことで当時、ここにも配置され湾に入ってくる船は也良の埼の番人がまず見つけられることから、也良の埼守に「早く告げこそ」と頼んだと思われる（十首のうちの七首

目の歌）

・十首の後に記述されている左注によると奈良時代の初め神亀（724）729）の年中、志賀島に住む白水郎（＝漁師・海人の異称）『荒尾』が、大宰府から対馬（現・長崎県対馬）に官の食糧を運ぶ官命を受けた友人からの、たつての願いに応えて対馬に食糧を運ぶため船を出す途  
中暴風雨にあつて船が沈没し、ついに帰らぬ人となった。

・この十首の連作は『荒尾』の妻子が荒尾の生還を念じて詠んだ歌と云われるが、一説には筑前の国守・山上憶良が妻子の悲しみを思いやってその心中を述べて、この十首の歌を作ったともいう。

・なお、当時、対馬への食糧の運送は筑前・筑後・肥前・肥後・豊前・豊後の諸国は、毎年二千石の米を島司と防人の食糧にあてるため、交替で行う事になっていたようである。

（参考文献）伊藤博著「萬葉集釈注」滝口弘著「九州の万葉」 万葉集地名歌総覧他



○博多湾風景

- ・ 北側（右）に浮かぶ島は『荒尾』の住んでいた「志賀島」
- ・ 南側（左）に浮かぶ島は北端の岬（也良岬）に埼守（防人）が配置されていたと見られる「能古島」
- ・ なお、真中に玄界灘に浮かぶ島は「玄界島」



- ・ 風景画は百道浜海岸（福岡市早良区）から描く（杏花）